

直範囲は、対流圏内各等圧面について調べれば自から決まってくるのでその点については特にふれなかったが、100mb面と地上との間の関連性は地上付近の高低温に対して明らかな感応を示して興味深い。

さらに1964年の場合の広島、境における半旬日照平年偏差（第6図左下）は負であるから地上付近の収束は推論できるし、1962年は著しい正偏差（第7図左下）であるから下降気流を考慮することができる。後者については、和田はかねてから晴天による地面からの放射効果の積み重ねを主張しているが、あるいはその効果も十分考えられるかも知れない。1963年の場合は日照は平年並（第8図左下）で下降気流が特に卓越しているとは考え難い。

5. あとがき

冬期間中の中国地方における異常高温は、圧倒的に500mb高度偏差場で示される正偏差域の中に入って出現するが、負偏差域内にあっても現われる3例について究明をしたところ、鉛直構造的にみた異常高温出現の機構

が全く異なっており、概観すると、圏界面を含む上下層（その範囲は年により異なる）内の半旬平均気温平年偏差が正か負かに対応して、下層の異常高温が下降気流を主役とするか、暖気移流を主役とするかに分けられるようである。さらに500mb偏差場での偏差風に伴うものも含めて各層での水平暖気移流で説明できるように見える例でも、鉛直構造的には下降気流を主役とするものと類似していて両者の効果の割合を区別することは難かしい。

最後にこの研究について貴重な御助言を戴いた気象庁長期予報管理官和田英夫博士に深謝します。

引用文献

- 1) 久保木光熙, 1964: 寒候期予報法の検討, 研究時報, 16, 118-135.
- 2) 和田英夫・朝倉 正・田代茂夫, 1965: 寒候期予報法の検討, 研究時報, 17, 259-285.
- 3) 朝倉 正・久保木光熙・久保田効, 1966: 寒候期予報法の検討, 研究時報, 18, 271-296.

気象学会および関連学会行事予定

行 事 名	開催年月日	主催団体等	場 所
夏期大学講座	" 7月29日～ 8月4日	日本気象学会	気象庁講堂
夏期月例会 「気象学史と気象教育」	" 8月27日	"	気 象 庁 第3会議室
夏期講演会 シンポジウム「日本の AMTEX (GARP) 計画」	" 9月3日	講演企画委員会	気 象 庁
THIRD INTERNATIONAL CONFERENCE ON WIND EFFECTS ON BUILDINGS AND STRUCTURES	" 9月6～11日	(気象学会後援)	東 京
INTERNATIONAL SYMP- OSIUM ON DYNAMICS OF IONIZED GASES	" 9月13～5日	日本学術会議	東 京
日本気象学会総会 および秋季大会	" 10月5日 ～8日	日本気象学会	札 幌
自然災害科学総合 シンポジウム	" 10月5～6日	自然災害科学研究班	札 幌
流体力学講演会	" 11月4～5日	日本航空宇宙学会 流体力学懇談会	大 阪